

ホトトギス

昭和二十三年三月二十八日
明治三十一年十月十日
第三種郵便物認可
毎月一回
日券
平成十六年十月二日発行
二百七卷第十号

ホトトギス

十月号



旬日記 汀子

平成十五年十月一日 ロイヤル俳壇

長月の快晴の朝はじまりぬ
喰はれぬに葉に見当らぬ菜虫かな
不作てふ新米常の如届く
長月やはみ出しさうな予定表
快晴の朝のはじまる露時雨

十月四日 芦屋ホトギス会

朝の間のそぞろ寒はや消えて着く
稲の出来間は 旅路の一景に
朝空に今日のはじまる 罌雲
畦を行くときはばつたを道連に

十月五日 関西野分会

秋の空雲しりぞけてしりぞけて
押し出してくる雲のあり秋の空
ばつたとび立たせてここが近き道

十月六日 ロイヤル俳壇

あ秋の夜空の星を見せたかり
長月の雨の朝のはじまりぬ
快晴も雨も 大気も長月に

十月七日 大阪倶楽部

秋風や 夜飯は満天の星約す
こんなにも省略されし案山子かな
所在なく見えて案山子でありしかな
高く活けられし尾花は間はずとも

十月七日 綿業倶楽部

朝より約せし如く菊日和
何かある水を落してしまひけり
水落し不作の憂ひなかりけり

十月十三日 清交社

十三夜 火星の名残 伴ひて
後の月いれたび夜空仰ぎしか
十月九日 清交社

十月九日 清交社

不作の田とても来てゐる稲雀
近づきて遠ざかるとき薄紅葉
奥入瀬の薄紅葉には懐古あり
雨のち晴薄々紅葉薄紅葉
山の田をこぼれきすと稲雀
露寒の朝の間にすする旅仕度
露日の松の手入の一日目
新酒利くときは禁酒の枷を解く
みちのくの旅へ期待の薄紅葉
十月十日 工業倶楽部

みちのくの旅の近づく十三夜
旅多きこと露寒に心して
馬肥ゆる北の大地の便りかな
光りつつ露寒消えてゆく朝
十月十四日 西の虚子忌

十月十五日 夏潮旬会

一筋の日矢秋冷を貫きぬ
降り出して露けき横川詣かな
視野とらへたるより山路薄紅葉
十月十五日 夏潮旬会

十月十六日 クラブ合同

帰国せしばかりと聞くも爽やかに
マロニエの実の語る旅聞かずとも
みちのくの旅へ満ちゆく十三夜
六甲の眼白は風に乗りて来る
なほ満つる心華やぎ後の月
十月十八日 ホトギス社野分会

十月十九日 野分会

快晴といふ冷やかな朝発ちて
露けしやあけ戻しては秋時雨
露の戸を探す二丁目一番地
露けしと言ひ快晴と言ひ直す
十月十九日 野分会

十月二十日 無名会

うしろにも跳ぶ気配ありばつたかな
十月二十一日 有恒倶楽部
朝空を一瞬暗め鳥渡る
日当りのよき庭となる松手入
露寒のどつと着きたる本整理
一斉に朝風となる渡り鳥
殿の首の長さや渡り鳥
近道をして来し内結草風
朝かげを川に落して鳥渡る
十月二十三日 きざらぎ会

十月二十四日 時雨会

身に入みて仕事の手順とどのふる
菊束ね包みまきれざる香を纏ふ
出来上りたる写真集身に入みぬ
大輪の菊の香いつも羽音寄せ
しなふてふことなく菊活けにけり
菊の香に惚ぶ心となりけり
どちらかと言へば小菊を選ば供華
十月二十三日 きざらぎ会

十月二十四日 時雨会

山路今野菊に琵琶湖見え隠れ
石路の花咲きて忌日を近づけし
計画の動きははじめぬ秋深し
近づいてまこと紫式部の実
露寒きこと忌心深きかな
みちのくはつづく遠しきりたんぼ
消息の如く届きぬきりたんぼ
十月二十五日 旬会と講演の会

十月二十六日 年尾忌

障子貼り終へて光と音の中
扉越えてくるもの猫と薦紅葉
仕事又残りて秋を惜みけり
十月二十六日 年尾忌

十月二十六日 年尾忌

秋晴を極めたるより忌の心
露けしや四半世紀を経し忌日
咲くものも咲きつゝあるも秋惜む

十月二十六日 年尾忌

追はるるも追ふもばつたでありしかな
行秋や都心の夜にある静寂

休 暇

稲畑汀子

クラブ合同俳句会を終えて大阪から帰宅すると幾つか電話が掛かっていたことをメモを見ながらよしえさんが伝えてくれた。

「明日の朝日俳壇は台風が来るという予報なので、お休みして頂いては如何かと担当の方からお電話がありました」

まだ五月である。台風二号が発生したというニュースは知っていたが日本に影響するとは思っても見なかった。特に関西には影響が無いので心配していなかった。そのうちに東京へは影響がありそうだと思われ、あれよあれよという間に、金曜日の朝は東京に上陸しそうな勢いになって行った。急いで朝日俳壇の田沢さんに電話を掛けた。

「稲畑先生、明日は教育委員会のためにとんぼ帰りの日ですね」

「ええ、そうなの、帰れなくなると困るなーとは思っていたのだけれど」

「他の先生方の選が済んだ葉書をお送りしますから、明日はどうぞお休みください。たまには休養をお取りになって頂くのもいいでしょう」

「じゃーそうさせて頂くかしら。欠航になるかも知れないわね」

「いよいよ、その様ですねー」

これまで殆ど休んだことはなく、五千回以上飛んだ表彰状が日航から送られて来て久しい。

「じゃあ、喜んで休ませて頂くわ。他の方々によろしく」

「よろしくお伝えして置きます。仕事はお送りしますのでよろしく」

く

すっかりその気になると、溜まっていた仕事が出来るといい機会を与えられたような気になってすっかり嬉しくなった。

上京する日は五時に起きる。空港の駐車場は最近気に入った場所へ駐車するためには六時迄には行かなければならない。

明日は同じように起きて仕事をしよう！

何となく嬉しくなってきた。

早々と目が覚めた。時計を覗くと四時少し回っていた。

「そうだ、今日は東京へ行かなくてもいいのだ」

そうつぶやいて再びベッドに横になった。目が覚めた。五時少し回っていた。

「今日はもつと寝られるんだわ」

又、横になった。いつか外から日が差して部屋が明るい。

「大変だ。寝過ぎした」

一瞬、あわてて時計を見ると七時である。

「あー、今日はいいのだ」

テレビのスイッチを入れて又、横になった。眠っている夢の中

で九時の時報を知った。

「いくら何でも起きなきゃ」

朝風呂を入れて何時ものように五分間正座した。本当なら、今頃東京の朝日新聞社の中でせつせと葉書をめくっているんだと思うと何となく楽しくなった。

「今日はゆっくり休まれてよかったですね」

食堂に下りていくと朝食のおみおつけの湯気が立っている。テレビをつけてゆっくり食事を済ませるともうお昼に近い。

「え？ もうこんな時間。嘘ー」

仕事は何にもしていない。

「あ！ 大変。教育委員会に行かなくちゃ」

何にもしない時間がどんどん経って行った。

「東京からとんぼ返りですか。台風が逸れてよかったですね」

藤原教育長が何時もと同じようににこやかに迎えて下さった。

「今日は芦屋からです」

「そうですね、東京は台風は逸れたようですが雨がひどいようでしたね」

何にも仕事をしないで出掛けて来たことで忘れものをしたような、何だか申しわけないような気分になっていた。

「少しは休養になったでしょうか。葉書をお送りしますので宜し

くお願い致します。来週のお迎えは芝公園と心得ております」

家に帰ると田沢さんのメッセージと一緒に葉書が一杯つまった大きな段ボールが芦屋の家に届いていた。

廣太郎句帳

廣太郎

平成十五年十月一日 一水会

金風のルルドロザリオ繰る司祭

十月二日 蕉心会

シリーズの相手も決まり秋の声

大川に触れんばかりの鱒雲

秋風の出会とは大川端に

陰といふ秋風宿す一とところ

大川の水位高めて鱒雲

こぼれ萩アスファルトてふ舞台かな

こぼれ萩日本の土に還りけり

鱒雲 太陽丸く収めけり

薦紅葉日陰を恋うてをりにけり

十月六日 俊英句会

金風や君の心を紫に

西虚子忌も会はねばならぬ人

源氏山粧へば一忌日かな

秋郊といふ武蔵野に大和路に

食べられる菌と食べられぬ菌

十月九日 土筆会老柳山莊吟行

身に入むや山盧の昔知る人と

こんなにも富士の初雪近づけて

錦秋の山歴も富士の一部分

十月十四日 西の虚子忌

うそ寒の邂逅となる一忌日

冷まじや大姉加へし一忌日

十月十六日 登高会

あんぐりと口ぼつかりと秋の雲

秋の雲星に吸はれてゆきにけり

河原てふ草の錦を来し二人

色鳥や空の碧さに紛れざる

枝動くより色鳥の現れし

十月十九、二十日 はつびい吟行会

見上げれば青空見下せば黄葉

水澄みて空澄みてダム天端かな

稜線の黄葉は空に溶けやすく

撫黄葉日表といふ華やぎに

撫落葉踏めば音色の濡れてをり

飛行機のUFOめきて天高し

黄葉して虚子の遠山あれかいな

朝寒に目覚の早き君と僕

濃き方へ羽音集めて吾亦紅

昨夜星を隠せし今朝の天高し

一枚の黄葉零して翔ちしもの

杉の秀の高きを選び小鳥来る

行秋やどうした阪神タイガース

落葉踏む音を殺して瀬音聞く

錦秋の一面占めて陶器市

風の精紅葉大地に還しけり

十月二十一日 草木瓜会

秋の暮火星を少し遠ざけて

野路菊に日矢は優しくなつてをり

野路菊の咲けば比叡の出会かな

一本の野菊侍らせ辻地蔵

十月二十二日 目黒学園句会

秋霖に日本シリーズ長引きぬ

天界の声引き連れて小鳥来る

椋鳥の占め神木でありにけり

十月二十二日 三番町句会

寿福寺に添水の鳴れば忌日来る

稲架組んで越後の景の整へり

一声を発して鴉の贅となる

十月二十五日 ホトトギス杜句会

甲子園球場怒濤 薦紅葉

十月二十六日 年尾忌

年尾忌や大姉となりて御許へ

写真集最後を飾る榎植の実

十月二十八日 若水会

冬耕や都心に猫の額ほど

日当りて戻りて山紅葉かな

冬耕に疲れ切つたる五感かな

紅葉して全山に影なかりけり

雑詠 汀子選

物思ふとろりと暑き日なりけり 豊中 滝 青佳
 漱石を読めば明治の風薫る 同
 武士道は生死の美学梅匂ふ 同
 屋月の淡くかかれる花万朶 熊野 浅井青陽子
 啼き止みし鶯くぐる籬かな 同
 菜飯炊き呉るゝ長女ぬ老知らず 同
 明易のリズムに合つて来し齡 吹田 宮崎 正
 松蟬の鳴いて山荘らしくなり 同
 離陸機の茫と消えゆく夏霞 同
 蝶といふ吉野に紛れ易きもの 東京 稲畑廣太郎
 花といふ一惑星の物語 同
 花を去る句帳切符に持ち替へて 同
 黒潮に張出す岬麦の秋 神戸 山田弘子
 丹波路や胸の低まで風薫る 同
 噴水の水棒となり網となる 同
 たつぷりと水吸ひ上げてゐる茂 榎原 稲岡 長
 放たれし草矢の曳きし時間はも 同
 列車もう丹波に入り夏の霧 同

時鳥足下に摩耶の景開け 姫路 桑田青虎
 倦む程に鳴く時鳥天上寺 同
 入院の妻に夜店の金魚玉 同
 薔薇手入ばらの雫に濡れながら 龍ヶ崎 今橋真理子
 薔薇の園詩集繙く如めぐる 同
 一片は音信めきて薔薇の散る 同
 母の日や偲べば父の面影も 京都 安原 葉
 母の日や母と在りし世近づけて 同
 休養をとれと卵の花腐しかな 同
 沙羅咲けば昨日を思ひ明日を思ふ 神戸 後藤比奈夫
 金魚玉赤は大きく見える色 同
 見覚えの時計がいくつ時計草 同
 太陽が第一番に夏めきぬ 京都 粟津松彩子
 更衣背筋に風のありにけり 同
 焼鮎の抜きたる骨の香りけり 同
 河鹿鳴く闇に視線の動きけり 東京 橋本くに彦
 独唱は石のステージ河鹿なる 同
 その中のマリアカラスと言ふ河鹿 同
 プーさんも星の王子も黴の書庫 神戸 長山あや
 薔薇散つてきのふの我の散り果てぬ 同
 鬼の山より剪られ来し朴の花 同
 梅雨晴のほくほく線へ乗り継げる 群馬 木暮陶句郎
 雨上がりさうなきらめき苔涼し 同
 わが航も飛魚も隠岐目指すかな 同

雑詠句評（九月号より）

帰宅するまでは気づかぬ花疲 秋田 浅利恵子

の日々がよく見えてくるのである。様々な事情が背景にはあるであろうが、今の作者が見えてくる句である。（汀子）

芳子・忠彦・憲明
青虎・中正・保佳
静龍・美奇・明倫
葉・千鶴子・汀子

暖かや外に出て知る家居あり 東大阪 東野一彌

作者は家居される方が多いのであろうか。それとも、家居をしていて外に出てみて、はじめて外の暖かさ明るさに気づかれ、家の中と外とはこんなにも違うことを肌身に感じられた。よくこういうことはあるもので、何でもない実感をさりげなく表現されている。反対に外から帰って来て家の中の暗さを感ずるといふ句もあるが、この句は春の来るよるこび、太陽の明るさが手にとるようで、やはり家居よりも外へ出る健康を思い返されている。卒直で実感のこもった句である。（芳子）

久し振りに外に出てみた。ああ何と暖かく心地よい日であることか。家居を続けていた時はそれを受け入れていたのであるが、やはり外の空気を胸一杯吸い込んでみると家居

「花疲」もこの様に詠られると全くその通りで、「帰宅するまでは気づかぬ」という言いまわしも、なる程その通りの表現だとほほえましい。誰しも花見に出掛け、その環境下にある間は、いわゆる花疲など一切無頓着で、気にもかからないものである。

（忠彦）

桜に遊んだ一日はまことに満足した時間であった。美しい桜に思わず遠くまで歩いてしまった。家に帰り着いた時に始めて覚えた花疲れ、それまでは桜に憑かれていたのである。見事な花を描くのになこのような手法が生きてくる。（汀子）

（以下略）

若水集

廣太郎選

鈴蘭・五月雨

鈴蘭を抱いて花嫁出来上がる 香川 内原弘美
 鈴蘭のブーケよここに飛んで来い 同
 五月雨やワイパーにジャズ囃み合はず 同
 天と地を結びし如くにさみだるる 芦屋 奥田好子
 五月雨のすべては纏て大地へと 同
 お行儀の少女のやうな鈴蘭よ 同
 鈴蘭や言葉探してゐる見舞 香川 赤松雅人
 立ち尽す会葬の日や五月雨るゝ 同
 五月雨に湿る煙草と靴の音 同
 鈴蘭の香の掌に乗つてをり 島原 中川秋坊子
 この頃を鈴蘭が呼ぶ蝦夷が呼ぶ 同
 鈴蘭の見えず香の見えをりし森 同
 鈴蘭の秘するしたたかなる野性 神戸 長山あや
 野のいのち悼み鈴蘭風に鳴る 同
 鈴蘭を賜ひし君と共白髪 同
 五月雨るる日の過ごし方ありにけり 金沢 坂井光代
 五月雨や水の豊かな日本好き 同
 しづかさや五月雨るる日の長電話 同

五月雨や洗車のやうな大雫 八代 懸崎由美子
 五月雨や友と相合傘になり 同
 五月雨や傘持ち歩き仕事場へ 同
 川幅を満たす濁流さみだるる 札幌 荒船青嶺
 五月雨や濁流蛇行して海へ 同
 五月雨やときには薄き日のさして 同
 五月雨に濡れさみだれと気づかざる 大宰府 持永真理子
 五月雨や匂ふがごとく句碑のあり 同
 考へに五月雨傘の傾ぐまま 同
 鈴蘭のとり残されてゐて可憐 大津 丹後浪月
 鈴蘭の香り一本づつ渡す 同
 五月雨も濁りも真野の入江なる 同
 青々として鈴蘭の野でありし 熊本 永野由美子
 鈴蘭の原風匂ふ土匂ふ 同
 鈴蘭のひと粒づつに光あり 同
 路地奥に野の鈴蘭の馴染みをり 宝塚 片岡淑郎
 スリッパを干す美容院さみだるる 同
 五月雨を鏡に嵌めて理髪店 同
 鳥の音を遠くに残し五月雨るる 松山 中野匡子
 一山の五月雨集め濁り川 同
 五月雨やパソコンのキー湿りがち 同
 日差しより風の恋しく五月雨るる 鳥取 中村襄介
 雨垂れに変へ五月雨を落す樹々 同
 鈴蘭の花まで風の届かざる 同

若水集句評 廣太郎

そんな状態なのである。恐らく大切な車を汚され、あまり良い気持ではないのだろうか、ユニークな視点で季題を捉えている。

五月雨やワイパーにジャズ噛み合はず 香川 内原弘美

車を運転している最中なのだろう。カーオーディオからは軽快な「ジャズ」が流れているが、外は丁度「五月雨」が降り、「ワイパー」が作動している。単調なワイパーの動きと、ジャズを重ね合わせ、季題のじくじくとした感じが不思議とびつたりと絡み合いながら伝わってくる。

鈴蘭や言葉探してゐる見舞 香川 赤松雅人

どうしても見舞は病人に対しての気遣いが必要になる。句柄から見ると、少し病状の思わしくない人のような印象があるが、何かそれが季題「鈴蘭」の姿とオーバーラップして少し哀れな印象を受けるが、作者の優しさも見て取れる句である。

五月雨や洗車のやうな大乗 八代 懸崎由美子

一句目に続いてこちら車が題材になっている。水で車を洗って直ぐ見ると大粒の水滴がついているが、この時期まるで何時も

鈴蘭の大地競走馬の育つ 大阪 田原憲治

やはり印象としては北海道がよく似合う「鈴蘭」であろう。一見して広い野原一杯に咲いている姿と、馬の様子を通して北海道が想像出来る。可憐な花ではあるが、群生を想像する事により、ダイナミックな姿が目の前に広がってくる。

地下街の五月雨傘に濡れにけり 高松 永森ケイ子

外では「五月雨」が降っており、地下に入ると皆その傘を畳むのであるが、やはりどうしても濡れたままの傘はどうしようもないのである。せっかく雨を避けて地下にはいったのに、却ってその濡れた傘に触れて服などが濡れてしまったのである。この季節の鬱陶しい様子が素直に表現されている。(以下略)